

## ざいそう

## 恩返し

大澤 龍一



私の記憶は、おおよそ小学校に通い始めた頃から、部分的に頭に残っているようである。

その当時も、70件ほどの集落だったが、住民は大人も、子供もみな顔見知り、どこの家で何があるか、すべて共通認識。子供のけんか等は日常茶飯事であったが、年長者がうまくなだめ、舵取りをしてくれた。いわゆる地域の中での集団生活みたいなものである。

農村においても、まだ機械化されておらず、各家庭の大人はみな農作業にかかりきりの時代である。子供は朝から日暮れまで、群れをなして遊びんでいたものだ。地域の大人みんなが親代わりみたいなもので、わけ隔てなく、良いことは良い、悪いことは悪いとはっきり教えてくれた。いまの時代のような、いじめ、はなかったように思う。テレビもまだ数件しか普及していない時代である。そういう環境で育ち、親、大人の言うことは絶対であった。その中で叱られ、教えられ、今でも物事を考え、創造するときには様々なところで役に立っている。

記憶に残っていることで、ご飯は「こぼしたら拾って食べる、人に食べられる為に1年掛けて実ったもの」とよく言われたりもした。そういう話にも後があり、人間一人一食一合、1日三合、要は1日一坪の広さで採れる米を食べている。昔の人は一反360坪で1年食べたと聞かされてきた。その話を、今の田圃の規格に当てはめると少し違っているようだ。一反が300坪であり、何時の頃から違ったのか、太閤検地の頃なのかよくわかっていない。その当時、私はまだ小学生であり、中身は理解してもいなかったと思う。ただ、ものの存在と考え方、ものを大切にする意味を教えてもらったと思っている。いまの飽食の時代、大量消費の時代にも心に留めておきたいものである。

それから私が中学生になる頃までに、時々近くの神社に、よく榊を上げに行ったこともあった。「行った」と言うよりも行かされたと言ったほうがいい。それも

その当時は、ただ行って水を替え、榊を替えてお参りしてただけだった。後になり、その行為そのものよりも、それを行う心のあり方と思うようになった。とかく社会生活のなかで、物事に対する不平、不満、欲望、願望はすべて自分の心次第であり、その気持ちのコントロールで結果は出てくると思っている。私にそれを行わせたのは、その心をいつか理解するだろうと思う気持ちからなのか、良い方に解釈をした。

時代が過ぎ、家族、周りを見渡した時、何か自分がやるべきことを忘れてきたような気がする。周り、地域とともに生きる気持ちなのかもしれない。自分にはまだそれだけの気持ちのゆとりがないのかもしれない。「温故知新」ではないが古いものを知り、受け入れ、良いものは現代にマッチしたものにしてゆきたいものである。

現在、私は建設機械の販売店に勤務しており、サービス部門も担当している。「企業は人なり」の言葉にあるように人づくりが重要な課題である。人づくりには、営業職、サービス職、事務職と分野はあるにしろ、やはり物事の文化、歴史、原理原則、想いも伝えなければならない。とりわけサービス職では体で覚えることも重要である。特に技術職は昔から徒弟制度なるものがあるが、最高の人づくりと思っている。親方の技量、技術のみならず、気持、考え、方法、効率、どれをも伝承してくれる。企業にとっては、世の中の高齢化社会、少子化に対応した現代版徒弟制度、それは豊富な教育機材、人材を駆使して取り組んでゆかねばならないと思っている。

とりわけ、身近なものから周囲に感謝、地域に感謝で、接する人に繋げていきたいものである。

—おおさわ りゅういち 中日本キャタピラー三菱  
建機販売株式会社北陸事業部長—